

(2011年1月発行)

社会福祉法人後志報恩会『40年のあゆみ』より

そうだったのか私の福祉の忘れ物

社会福祉法人後志報恩会

名誉会長 野村 健

(銀山学園との出会いと私の夢)

北海道の福祉施設の名門、札幌報恩学園の山下充郎先生から知的に障がいをもつ人たちの「大人の施設」を建設中なので、施設長になって欲しいとの依頼があった。今から40年前、私が37歳の時である。札幌市役所で福祉係長の職にあった私にとって幸運であったことは、私が最も信頼する山崎忠顯理事長(当時27歳)と銀山学園を創設することができたことだった。

1970年厳冬、二人は旅立った。山奥に建設中の施設は豪雪に覆われ、風が吹けば停電し、雨が降らないと断水する惨たんたる状況で、借金1億円を背負った旅立ちは過酷を極めた。

私を支えてくれた思い、それは従来の自立を目指す福祉から、幸せを目指す福祉をつくりたいという夢であった。

(幸せを目指す新しい福祉への道)

銀山学園開設間もなく施設利用者の無断外出が続き、数人が地元ドライブインを荒し、オーナーのご配慮で事件にならなかったが、私は無断外出を規制強化しないでなくしたい!と強く願った。その願いは、地域宅訪問で嘘のように叶えられた。

「地域こそ幸せ実現を図る原点である」私の新しい福祉の幕開けである。障がいをもった人も希望すれば参加できる私たちの地域活動は、通称ノッコちゃんを初め、地元若人を中心に1976年から始まり、今も34年間脈々と続いている。



(皇太子殿下の人を癒す笑顔に感動)

私たちの地域活動は認められ、2007年「ヘルシー・ソサエティ賞」を受賞。全国から5人社会貢献者として、東宮御所にて殿下と懇談する貴重な機会が与えられた。殿下は私たちの活動に大変ご興味をもたれたご様子で、殿下の学友で今回教育部門から受賞した方から帰路の車中で教えられた。

皇太子殿下の人を癒す笑顔は、生涯の思い出として私の脳裏深く刻み込まれている。

(私の福祉人生の忘れ物と生涯の夢)

私の若き時代を支えてくれた福祉の思いは、「志・風雪・ロマン」であるが、今老いて衰え、癌と共生して初めて分かった思い、それは「安らかに死にたい」という思いだった。私はその思いを満たす方策を考えてこなかった自分に気づき、愕然とさせられた。

私の福祉人生の忘れ物である。宗教をもたない私の勝手な「安らかに死ぬコツ」は、感謝と笑顔で今を生きることであるが、笑顔の習慣がない私にはなかなか難しいものである。

夢なき民は滅ぶ。イスラエルの王ソロモンの言葉である。私は夢なき福祉は滅ぶと思っている。福祉に夢をかけて歩んでいる皆さんへの私の願い、それは安らかに死ぬる方策を含めた「福祉文化」の創出である。

夢がもてる日本の福祉が、皆の力で作られていく日を私はいつまでも夢見ていたい!